

中井精一（富山大学文学部助教授）
相本芳彦（KNBアナウンサー）

東日本と西日本のせめぎあい

標準語には置き換えられない微妙なニュアンスは、方言ならではの魅力の一つ。

富山県は、全国的にみても方言研究の盛んな地域だそうです。そこで今回は、越中の方言(富山弁)をテーマに、本学文学部で社会言語学を教える中井精一助教授をゲストにお招きしました。

聞き手は、富山弁を巧みに操る相本芳彦アナウンサー。知れば知るほど、ますます謎が深まる富山弁。皆さんも一緒に考えてみないけ！?

富山県は、有名な言語学者を多数輩出しています。

相本 アナウンサーは言葉で情感を訴えるのが仕事ですから、日頃から方言には大変関心を持っています。ところで、中井先生が方言を研究なさるようになったのはなぜですか？

中井 大学四年の時、国語学者である真田信治先生の講義を受けたのが、ことばの研究に興味を持つようになったきっかけです。

中井 西日本は母音を強調する言語ですし、東日本は子音に重点を置く言語といえます。子音言語の典型的なのは東京です。ですから、江戸の言葉は東北弁にかなり近いんですよ。富山県は、呉羽山以西が西日本、以東が東日本と表層では両方備えているが、もっと深いところでは両方のせめぎあいがあるところなんです。

相本 私は生まれも育ちも高岡市で、大学は東京でしたが、入社するまで県西部の方言にしか接したことがありませんでした。で、県東部出身の先輩アナに脳をくすぐられたとき、思わず、「コトヨガ（ワ）シイことしないでください！」と叫んだんです。そのとき先輩から、「おまえの富山弁は変だ。コトヨガ（ワ）シイが正しい」と言われたのが強烈な異文化体験となり、以来、富山弁の研究がライフワークになったんです。

コトヨガシイが、コトヨガシイか、それが問題だ。

相本 私は生まれも育ちも高岡市で、大学は東京でしたが、入社するまで県西部の方言にしか接したことがありませんでした。で、県東部出身の先輩アナに脳をくすぐられたとき、思わず、「コトヨガ（ワ）シイことしないでください！」と叫んだんです。そのとき先輩から、「おまえの富山弁は変だ。コトヨガ（ワ）シイが正しい」と言われたのが強烈な異文化体験となり、以来、富山弁の研究がライフワークになったんです。

中井 うちの研究室でも、「コトヨガシイ」について調べたことがあります。最初に取り組んだプロジェクトが、「二〇〇〇年富山県言語動態地図」の作成で、「しおからい」「や」「びり」などをどう表現するかを、学生たちが県内全市町村で四二〇人のお年寄りに質問し、そこから選りすぐった約二五〇のデータを地図上に記述していきました。こうして取り組まれた言語地理学という研究分野にあたり、今年三月までに約七〇枚の地図を完成させました。

相本 私は数年前、呉羽山を境にして「コトヨ」と「コトヨ」の逆転現象が起きていることを突き止めたんですが、先生の調査結果は？

中井 境界線を引くのは難しいのですが、呉羽山が一つの境目になっていることは確かです。おおむね県西部では「コトヨガシイ」類がよく口にされ、県東部では「コトヨバシイ」類が目立ちます。この二つがちょうど混ざり合うのが富山市辺りで、五箇山地方には「コソカイ」も息づいていて、西日本と東日本、飛騨など南からの影響を受けた富山の方言の特徴がよく表れています。

相本 呉羽山はそれほど高くもない丘陵なのに、どうして境目になったんでしょう。

中井 古い時代のことを調べないと明確なことは言えませんが、土地の人にとっては呉羽山が意識のうえでの境界になっているんですよ。物理的な障害ではないため、はっきりした線引きはできず、東は魚津、西は小杉辺りまでずれるケースもありますが、いろいろな言葉が重なり合うのはやはり呉羽山ですね。

相本 なるほど。呉羽山そのものではなく、呉羽山をはさんで東と西では違うんだという、人々の意識そのものが障害になっていたんです。

中井 県西部の人はきわめて西日本なので、高岡



Nakai Seichi

なかい せいいち

昭和37年生まれ 奈良県出身
昭和61年 天理大学文学部国文学国語学科卒
平成10年 大阪外国語大学大学院日本語学専攻修了
昭和63年 天理大学附属天理参考館博物館学芸員を経て
平成10年 富山大学人文学部助教授に就任
専門は日本語学・社会言語学



Aimoto Yoshihiko

あいもと よしひこ

昭和31年生まれ 高岡市出身
昭和54年 慶応義塾大学を卒業後
北日本放送欄に入社
平成12年 報道制作局制作部長に就任

かけです。真田先生は、実は富山県の五箇山のご出身なんですよ。

相本 その頃から富山県とはご縁があったんですね。

中井 富山県は、近代期に日本の方言研究をリードした太田榮太郎先生の故郷でもあり、専門家の間では方言研究の盛んな地域として知られています。なかでも富山大学人文学部には、異色の言語学者として知られた都竹通年雄先生をはじめ、私の恩師である真田先生が教えを受けたという川本栄一郎先生、斎藤孝滋先生などが築いてこられた方言研究の伝統があります。この地との不思議な縁を感じずにはいられません。

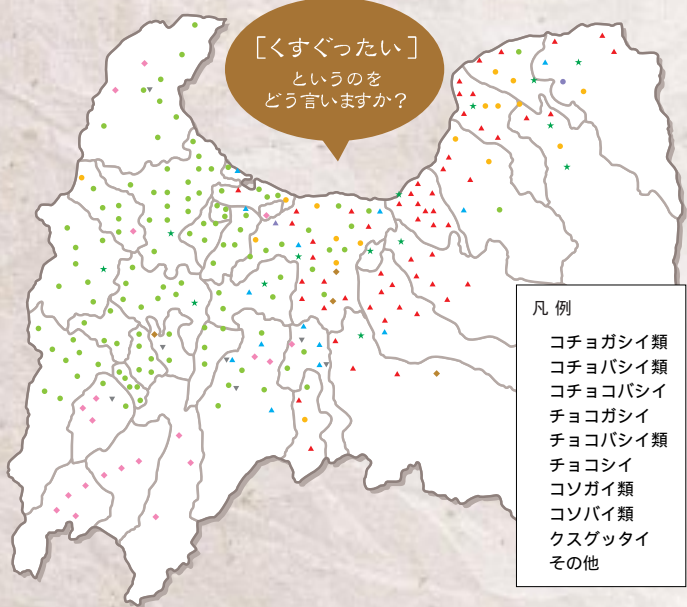
相本 ところで、中井先生は大学での講義もずっと関西弁ですか？

中井 はい。私は子どもの頃からこの言葉で育ち、小・中・高校と国語の先生も関西弁だったので、これしか話せないんです（笑い）。本来、公教育では標準的なものを学ぶべきだと思いますが、私の場合は幸か不幸か、東京（共通語）をまったく意識せずに育ったんです。

相本 そういえば、関西方面の出身者がアナウンサーを志望するとき、一番苦労するのが無声化だそうです。京都や大阪の人にはもともと鼻濁音がないから、訓練しようと思ってもできないんですね。



中井 県西部の人はきわめて西日本なので、高岡



中井 一四〇〇人にアンケート調査をした結果を今年度中に冊子にまとめて、「日本語文化調査報告」第二号を発行したいと考えています。また、新しい試みとして注目してほしいのが、方言の音声情報処理プロジェクト



調査などで、各地に歩くことが多いのですが、はじめて行った土地なのに、はじめて出会った人なのに、なにかはじめてではない、なつかしい気持ちにさせられる時があります。相本さんもそんな気持ちにさせる人でした。話し方やことは違いますが、その人の人柄や個性が現れると言われますが、今回、ここのプロト対峙して、改めてそれを考えさせられました。

(中井精一)

て、全国的に方言が消えつつあるといわれますが、二〇歳前後の学生さんは富山方言をどう思っているんでしょうか。
中井 若い人たちはうまく使い分けていますよ。恥ずかしいから、よそからきた人には使わないけど、仲間同士では若い人なりの方言で話しています。
相本 お年寄りは方言に対する愛着がすごく強いせいか、ほんの微妙な違いにもこだわりますね。
中井 譲れるところはすごく柔軟な反面、こだわるところはとことん頑固なのは一種の県民性でしょうか。東西がぶつ

かり合う地域だからこそ、自分を見つめる機会も多く、言葉にもこだわらなんでしょう。若いときは中央(都会)に対して卑下しがちだったのが、年をとるにつれて自分たちの暮らしの豊かさや、生活の満足度の高さが、自分の言葉がスタンダードであるという自信になっていくんだと思います。
相本 最後に、今後の取り組みについて教えてください。
中井 一四〇〇人にアンケート調査をした結果を今年度中に冊子にまとめて、「日本語文化調査報告」第二号を発行したいと考えています。また、新しい試みとして注目してほしいのが、方言の音声情報処理プロジェクト



「データから予測し、検証していくのが僕らの学問です。」

トです。これまでも方言を文字や記号で記述したものはありましたが、一般人にはわかりませんし、微妙な記号は置き換えられないのが欠点です。この調査では言葉を実際の音声そのもので残し、パソコンに取り込んで音声データベースソフトで言語地図を作りたいと考えています。
相本 おもしろそうですね。私たちもぜひ参考にさせていただきます。
中井 東西両文化のせめぎあう富山は日本の縮図ともいわれ、社会言語学には最高のフィールドです。大変充実した研究・教育環境のもと、学生たちとともに楽しく調査をさせてもらっています。
相本 CD ROMができれば、ぜひ欲しいなあ。私たちにとっても大変ありがたい資料であり、おおいに期待しています。きょうはどうもありがとうございました。

対談を終えて…



富山弁のこと
大学に入って一人暮らしをはじめたとき、母が上京してきた。一緒に出かけた商店街の金物店で、「あっちゃー、両手鍋もいるがでないがけ」「箸入れもこうとかね」店内に響く富山弁が恥ずかしくて他人のような顔をしていたら、店の主人が話しかけてきた。「あー、富山からこられたがですか?」聞けば同郷高岡出身とのこと、ずいぶん安くしてもらった。思えば、「富山弁」の恩恵を受けたのはこの時が最初だったんじゃないかな。

(相本芳彦)



「言葉の分布は、一つのものさしでは測れません。」

の人はすぐわかります。アクセントに関しては県内どこもだいたい西日本的ですが、西へいくほど文法的な要素も西日本的になり、逆に東へいくほど東日本的になるんです。ある種、縄文につながるような文化や言語圏を残しているという意味で、西と東のせめぎあいがまだに残っているのが県東部です。

店先に新巻を吊ってあるのを見て、絶句しました。



相本 富山の売薬さんは全国津々浦々へ出かけていったのに、言葉が混ざらなかったのはなぜですか?
中井 行商に行く先との間で、文化的、権力的な絶対的な力の差がなかったからでしょう。当時、薬を売るには神様などの宗教的な権威づけさえあれば十分で、

わざわざ相手の言葉に合わせる必要もありませんし。また、たとえ影響を受けたとしても、地元へ帰れば地元の言葉で話す習慣があつたんでしょう。
相本 高岡商人が関西で商売したのとは事情が違うんですね。
中井 高岡商人と関西の豪商とでは、資産の差が歴然としています。絶対的な力の差は、言葉遣いにも大きく影響しますからね。また、上方と仕事をすることをアピールするためにも、高岡商人は好んで関西弁を使つたんでしょう。
相本 すると、富山の方言はどのようなジャンルに分類されるんですか?
中井 よくいわれるのが西側の東の端っこ、つまり、西側の防人的な方言ということですね。日本のほぼ中心にあたり、東との接触も盛んで、東日本と西日本の方言がぶつかりあうのが富山方言の特徴です。日本海側は東北から島根県辺りまで同じ文化圏につながり、県東部には原日本的な要素も多く見られます。
相本 出雲言葉の取材にいったときに感じたんですが、強烈な出雲言葉を使つたおばあちゃんの話方が、何となく県東部の朝日町のおばあちゃんに似ているんですよ。出雲のおばあちゃん朝日町のおばあちゃんの話をして、近所のおばあちゃん



「言葉には、文化的な要素が反映されているんですね。」

「ここは西日本じゃないのか」と絶句しました。お正月の新巻は東日本のもので、西日本では売っていませんから。ただし、富山の場合は東日本から入ってきたというよりは、もともとそういう文化が地元

にあつたんでしょう。言葉の深層に関わる部分を見ていくと、そんなに単純ではありません。歴史背景やそれぞれの土地に暮らす人々の意識が、言葉にも深く関わっているのです。
富山弁は永遠に不滅ですね。
相本 去年と今年の二回、KNBのアナウンサーが新年会というかたちで集まり、県内出身のアナウンサーと県外出身のアナウンサーがそれぞれ富山の風俗や習慣、言葉についておもしろおかしく語りあつたんです。それをビデオにまとめて販売したところ、なんと六〇〇〇本もバカ売れしたんです。
中井 私たちも調査をしていて嬉しいのは、言葉に興味を持っている地元の人が非常に多いことです。特に富山の人は親切ですね。関西で聞き取り調査をする時と断られることもあるんですが、富山では断られたことがないんです。皆さん、面倒見が良くて親切です。これは学会でも発表したんですよ。(笑い)
相本 まったく同感です。私たちも方言のことでインタビューすると、わざわざ近所の人を呼んできてくれたりして、すごく協力的です。
中井 五〇代以上になると、本当に富山弁が好きみたいです。学生と一緒に調査していると、若い人の勉強を応援してやるという気持ちもひしひしと伝わってきます。これは富山ならではの、得がたい美点ですよ。
相本 私たちマスメディアの影響もあつ

鏝こて絵とは?

— 地域文化の発掘と継承 — 鏝絵(漆喰彫刻)

鏝絵の魅力と漆喰彫刻家竹内源造

鏝絵とは壁に塗る漆喰の材料を使って、鏝で盛り上げた絵をいう。絵だから部分に着彩されたものが多い。この盛り上げ方が厚くなり立体に近づくと漆喰彫刻と呼ばれる。両者に共通することは主な素材はセメントでなく石灰であること。これに糊や繊維状のスサなどを混ぜて浮き彫りのように盛り上げる。シツクイの呼び名はセツカイのなまったもの。漆喰は当て字。石灰だから鏝絵や漆喰彫刻の表面は白色を特色とし、その質感にはしつとりとした凜々しい高貴さが漂う。だから白色の漆喰壁も鏝絵も富のシンボルとなる。

砺波の散居村を車で走るとアズマダチの家と土蔵の鮮やかな白色の漆喰壁が目に入ってくる。土蔵は、鏝絵や漆喰彫刻が塗りこめられる必然の晴れ舞台。そのシンボルは遠くからでも見える蔵印。地域の共同体を意識させるパブリックアートだ。蔵印には水の字や大黒様など招福除災を祈願するものが採られる。凝った土蔵になると高窓の廻り縁や屋根下の八巻きと呼ばれる漆喰壁に唐草模様が造られる。旧地主さんやお寺さんになると土

蔵入り口の観音扉や腰壁に豪華な鏝絵や海鼠壁が発注された。したがって鏝絵や漆喰彫刻は富裕階級の多かった戦前には需要があった。しかし、土蔵新築のニーズが衰退した今日、漆喰の技術は無形文化財級となり、残った鏝絵や漆喰彫刻は貴重な文化遺産となっている。

小杉町出身の竹内源造(二八六六 一九四三)は優れた鏝絵や漆喰彫刻をたくさん残した奇才である。鏝絵では富山市佐藤家の「白拍子」や、鯉の灌昇りなどが秀作である。漆喰彫刻では砺波市名越家土蔵壁の巨大な双龍(長さ十八メートル)、砺波市千光寺土蔵窓に見られる唐破風型の楯の龍や観音扉の鷹などは凄い。双龍のパワフルな遠心力と楯の龍の緻密な求心力。いずれも芸、技ともにはずば抜けている。浮彫、丸彫、透彫的な技法をミックス。漆喰彫刻の名前がびつたりだ。鏝絵から漆喰彫刻まで異彩を發揮した源造の業績は偉大である。小杉町に源造記念館が創立されるという。県内に散在する源造の作品を保存整備し発展継承するコア施設としてその役割が期待されている。



長谷川 総一郎 (はせがわ そういちろう)
Hasegawa Soichiro
1945年生まれ
教育学部 美術教育
1968年 富山大学教育学部卒業
1992年 富山大学教育学部教授
専門分野: 彫刻・地域文化教育



図4 大分県日出町尾方家「猿の三番叟」



図3 砺波市千光寺土蔵窓の龍



図2 富山市佐藤家の「白拍子」



図1 砺波市名越家土蔵の双龍(上:全体)(下:赤枠部分の拡大)

鏝絵サミット

さる九月二十二日、静岡県松崎町で「鏝絵サミット」なるものが開催された。このサミットの趣旨は、漆喰鏝絵を有する市町村や保存に取り組んでいる関係者が一堂に会し鏝絵の魅力について語る、というものであった。

パネラーとして、大分県 富山県 島根県 愛媛県、そして地元松崎町などの鏝絵研究のエキスパートが、それぞれの地域の鏝絵保存の現状を報告した。富山県からは田村京子さんと小杉町役場の関係者が団体に参加し、ひときわ注目を集めていた。話題の中心は、建物の取り壊しによって消えていく運命にある鏝絵をいかに保存して後世に伝えるかの問題であった。この点においても地域差は大きく、保存先進国の九州では、大分県の日出町や安心院町に見るように、多くの鏝絵を建物と共に保存し、観光客を誘致し町起こしの中心になっている。鏝絵を見るために見学者は敷地の中まで入ってくるので住人のプライバシーは損なわれるが、町の人々の積極的な協力によって成り立っている。富山県は竹内源造を中心とした鏝絵の保存に小杉町が本腰を入



丹羽 洋介 (にわ ようすけ)
Niwa Yosuke
1943年生まれ
教育学部 美術教育
1968年 東京芸術大学大学院美術研究科修了
1990年 富山大学教育学部教授
専門分野: 絵画

れて取り組んでいることが報告された。今回、全国の鏝絵を同時に見比べると、その地域ごとの作風の違いが余りにも大きいことに改めて驚いた。大雑把に区別すれば、富山や新潟などの北国の鏝絵が精巧な技術にウエイトを置いているのに対し、九州などの南国の鏝絵は仕事の緻密さよりも楽しい雰囲気を持った大らかさに特徴がある。庶民の芸術である鏝絵は極めて地域性が強く、それは当然のことながら、その地域の固有の風土性や文化を反映していることに外ならない。このようにローカル性に徹した各地の鏝絵を比較しつつ交流するのは良いことだと思ふ。それは、日本全国が均一化し没個性になりつつある今日、特に必要なことだろう。

伊豆の長八美術館をつくった前松崎町長の依田さんは生前、鏝絵をとおして「限りなく松崎的で、限りなくインターナショナルな町を目指そう」が口癖であった。地域の(庶民の)文化を大切にしながら、国際化などあり得ない、ということだろう。まったく同感である。

「問題解決の手法でなく、本質をとらえよ」



何事にも猪突猛進で取り組んだ大学時代

電子の時代の到来を予感
数学や物理が好きだった私は、地元の富山大学工学部に電子工学科が新設されると知り、迷わず受験しました。既に父が他界していたため、奨学金で足りない分は家庭教師のアルバイトで補うなど、学費や生活費はすべて自分で工面しなくてはなりません。しかも学費競争が盛んな頃で、学部での四年間はほとんど学業に身が入りませんでした。大学院に進んだのは、ろくに勉強もしないまま卒業してはまずいと考えたからです。折しも大学院工学研究科に電子工学専攻(修士課程)が設置されると聞き、OR(オペレーションズ・リサーチ)が学べると期待に胸をふくらませたのですが、設置が一年遅れたため、結局、電気工学専攻に進みました。

を傾けた後、「退学はいつでもできる。休学して冷静に考えてみたら」とアドバイスしてくださいました。そのときの、「数式や手法にはばかり目を奪われ、本質を見失ってはいけない」という言葉は、頭をガツンと殴られたような衝撃でした。

一年間の休学中、最初の半年は日雇いのアルバイトなどで金をため、残りの半年は高岡市の国泰寺を皮切りに全国の禅寺を回り、四国や九州にも足を伸ばしました。座禅を組みながら「核心とは何か」を考え、もの見方も大きく変わったと思います。復学した後は、まじめに生体情報の研究に打ち込みました。ディスプレイを通して学ぶ卒業を間近に控えた私は、ひよんなことから(株)インテックの入社試験を受けることになりました。人事担当者は、学生運動に関わったり、一年間休学した経験のある私を好ましく思わなかったようですが、面接に立ち会った当時の金岡幸二社長が逆に高く評価してくださり、私も、話のわかる社長だ」と意気を感じて入社したのです。

我々の仕事は情報通信の分野が主ですが、情報は情けに報いる、通信は信頼を通わせる」と書きます。「儲ける」という字も、信者と書くように、ファンを作ることが大切で、結果は後からついてきます。事業の究極の目的は、みんなが幸せに暮らすためのお役に立つことではないでしょうか。

ゲノム的にいえば、環境に対して常に進化するのが生物(人間)ですから、我々の後輩はより良い未来を築いてくれると信じたい。先生方も回顧的にならず、自らの体験をどんな学生に伝えてほしいし、若者も人生経験の豊富な年長者と積極的にディスプレイ越しに、幅広い視野を身につけるべきだと思います。

「若いときの失敗を恐れては何もできません」と語る末岡社長

末岡宗広氏 (すえおか むねひろ)

昭和24年 富山市生まれ
昭和50年 富山大学大学院工学研究科を修了、(株)インテックに入社。
平成6年 (株)インテック・システム研究所取締役に就任。
平成12年 インテック・ウェブ・アンド・ゲノム・インフォマティクス(株) (旧(株)インテック・システム研究所)代表取締役社長に就任し、現在に至る。



生涯学習教育研究センターとは

当センターは、富山大学が地域に根ざした学術機関として機能し、「生涯学習社会」の形成に寄与することをめざして、平成8年5月に設置されました。当センターの活動内容は、生涯学習に関する調査・研究、市民への学習機会提供、学習相談と事業PRの三分野になります。こうした活動を通して、県内の大学短大および小・中・高等学校等の教育機関、県や市町村等との連携を計り、産業界、地域住民の皆様のご協力のもとに、本学の豊富な知的財産を地域に還元しています。

幅広い大学開放をめざして

当センターでは、幅広い大学開放をめざして次のような大学開放事業を行っています。

【1】公開講座

本学の公開講座は、年間で37講座を開講しており(平成13年度)、かなり幅広いジャンルにわたっています。その中からいくつかをピックアップしてご紹介します。

まず、高度情報化社会への対応をめざし、パソコン講座を開講しています。パソコン講座は、基本ソフト「Windows」の入門にはじまり、表計算、画像処理、ホームページ作成入門、デスクトップ・パブリッシング(机上出版)等の技術指導をおこないます。また、シニア向けに「初心者でも大丈夫」なゆつたりとした進

度の講座も設けており、「最初は不安だったが、何とか使えるようになった」というご意見を多数いただき、「好評いただいています」。

また、健康・スポーツ講座では、ジョギング、テニス、ゴルフ等の講座があり、スポーツの理論と実際について学びます。なかでも「親子スキー」は、「親子で受講することにより、単なる技術指導ばかりでなく、普段とは違った「お父さん・お母さん・子どもたち」の姿を再発見する楽しい講座です。

それから、中学生・高校生等を対象に、「科学的な世界」にふれていただくこと、無料体験講座を実施しています。たとえば、「21世紀のものづくりと科学」(工学部主催)、「インターネットとロボットで知るネットワーク社会」(教育学部主催)など。

【2】公開授業

本学では、学生向けの授業の一部を市民の皆様へ公開しています。「大学の授業の雰囲気を知りたい」という方から、「専門技術を身につけたい」という方まで、存分に知的好奇心を満足していただきたいと思

います。

これまでに開講された公開授業として「環境経済学」「睡眠の科学」「こころの科学」「ポラリティア概論」「地域と人間」等がありますが、今後とも幅広いジャンルの授業を開講していきたいと思います。

事務室前の多目的スペース。受講者の憩いの場、くつろぎの場としてご利用いただいております。

【3】出張公開講座(出前講座)
地域で生涯学習を指導されている皆様方からのお求めに応じて、本学の教員が「出前講座」を実施しています。「環境問題」「男女共同参画社会をめざして」「青少年健全育成を考える」「親子で参加する楽しいおもちゃづくり」など、さまざまな内容を提供することができます。詳しくは、当センターまでお問い合わせ下さい。

さあ、学びましょう!

当センターは、本学正門から入ってすぐ、右手の黒田講堂の後方にあります。本学の公開講座を受講される方は、受講料を添えて(直接窓口で納入、もしくは現金書留での送金も可能)申し込みしていただけます。受講前のご質問・ご相談などございましたら、お気軽にお問い合わせ下さい。「富山大学で学んでみたい」という市民の皆様のお越しを心よりお待ちしております。



〒930 8555
富山県富山市五福3190
富山大学生涯学習教育研究センター
電話：076 445 6956
FAX：076 445 6960

生涯学習教育研究センター

センター長(併任 教育学部教授)
宇井 啓高 (うい ひろたか)

副センター長 教授
大石 (おおいし たかし)

専任講師
仲嶺 政光 (なかみね まさみつ)



熱心な受講風景



『おじいさんは山へ金儲けに』

著者：村上龍
NHK出版刊 価格：1,200円

不思議な本だ。十一箇条の投資の心得とともに、昔話に題材をとった十一編の寓話で構成されている。副題に「時として、投資は希望を生む」とあるが、これは心得の第一条でもある。二つめの寓話「桃太郎」は、おじいさんとおばあさんについて、「二人は貧しくて無知でした。ちなみに、貧困と無知は、人間の社会にとってもっともよくないことです。」と述べるところから始まる。もちろん、我々がよく知っている桃太郎の話とは似てもつかない話になっている。心得には、個々に解説もついていて、投資に関する基本的な考え方を知ることができる。寓話はどれも現代社会への皮肉にも、処世術にも、さまざまな人生模様にも読めて面白いが、ひとつひとつの寓話が投資の心得とどう関連するのかわくにも見えにくいところがある。投資に関する厳密な寓話と違って読むときっと消化不良になるだろうが、別々の記事やショートショートが雑然と同居していると思えば十分に楽しめるだろう。現に、寓話と解説を別々に読んだ方がわかりやすかった。巻末には村上龍と二人のエコノミストの鼎談もあり、盛りだくさんだ。

教育もある意味では投資である。親が子どもに教育に投資するのは、子どもも未来に希望を見るからだろう。「おとつさんとおかあさんが苦労して仕送りしてくれるのも、君が希望を生む投資だからなんだぜ」と学生に言ったら、困ったような顔をされてしまったけれど。

(加藤重広)

経済学部経営法学科 民事法

片岡研究室

Civil Law

前列左から4人目が片岡先生



「人」が経済回復の原動力

なかなか回復の兆しが見えない最近の経済状況のなかで、「我が家のメインバンクは大丈夫かな。後で聞いてみよう。」との思いを秘めて、銀行で債権管理を担当していたという片岡先生に、研究室の様子をうかがった。

先生は、銀行との間の金融取引に関する紛争等法的問題について研究されている。銀行との間の取引というと企業と企業の取引という印象を持つのだが、その基本は人と人の関わり合いであり、それがねじれたところに研究材料が転がっている。たとえ複雑な問題に出くわしても、法律を盾に裁定を下すのではなく、人間関係を修復することで問題を解決するという、現場経験者ならではの立場で、金融取引に関わる法律の教育を行っている。先生のゼミに参加している学生は、新聞などの報道資料を基に判例や法律の解釈に励むばかりではなく、一般の人が入ることのできない銀行の貸金庫や手形交換所を見学し、文字や言葉だけでは理解できない現場の雰囲気や体験する。金融機関から見学の承諾を得る際にも、先生の経歴がものを言う。

自ら考えて行動できる「経済人」の育成には、「知識」や「理屈」ではなく、「経験」が大事であるという教育は、「ものづくり」教育に通じるものがある。経済の回復も「人」の活躍なくして実現することはできないと言ったことを深く感じた。

(伊藤研策)

生き物たちの神秘と可能性

それぞれの動物は環境に適用して「うまく生きる」術を身につけている。カエルはみな湿ったところにいるのかと思ったら、砂漠に生きる種もいるという。「おなかのところから水を吸収するんですよ」と内山先生は、ネバダ砂漠に住むカエルの腹部を指さした。このほかに奄美諸島のカエルや中国のカエルなど、珍しい種類のカエルをみせてもらった。虫やカエルを追いかけた少年の心にふと戻ってしばし眺め入った。

内山・松田研究室は、多様な生息環境に適応する動物(魚や両生類などの脊椎動物)について、恒常性を維持するしくみを分子レベルから個体そのもののレベルまで研究している。例えば、腎臓が血液から尿を生成する際にもいくつかの異なる細胞が別々の仕事を果たしている、実はかなり複雑なメカニズムがあるのだという。また、最近話題にのぼることの多い内分泌攪乱物質(いわゆる環境ホルモン)に関する研究も行っており、研究の射程は広く、あらゆる展開につながる可能性をさまざまに秘めている。

学生たちの進学も就職もおおむね良好だという。「どんな学生が向いていますか」とお尋ねすると、内山先生は「生き物が好きなことが一番ですね」とおっしゃる。確かに、いろんな生き物と接し、生命の神秘と可能性に触れるには、生き物が好きなことが大事な条件だ。

(加藤重広)



◀アカモンヒキガエル(Bufo punctatus)

理学部生物学科 生体制御学講座

内山・松田研究室

Regulatory Biology



◀前列右側が内山先生、中央が松田先生。

『みんなの日本語教室』

著者：加藤重広
三笠書房刊 価格：1,300円

加藤 重広(かとう しげひろ) Kato Shigehiro
1964年 青森県生まれ
1996年 東京大学大学院博士課程修了
1996年 富山大学人文学部講師
1998年 同助教授
専門は言語学(語用論・統語論) 博士(文学)



だいたい世間では、言語学者とは「ことばづかいにいちいちうるさくて、できれば友達にはなりたくない」と人と思つらしい。「言語学? 手紙を書いたら添削されそうね」なども言われる。しかし、私は手紙を書くのは苦手だし、言葉遣いは荒っぽくて、がらっぱちなんである。

と、ある日、高岡の出身という三笠書房の編集者から、日本語の本を書かないかという話がきた。大野晋さんの二番煎じはいやだという、日本語の微妙な使い分けを書けばいいとの話。それで、「海で泳ぐ」と言うのになぜ「空で飛ぶ」とは言わないか、とか、それはいいが二つの意味になるのはなぜか、といったことを書いたらゴースサインが出た。日頃から日本語より英語のほうが論理的だと思いついていて、多分、日本語の論理がある」というメッセージを込めて書き始めた。

ややこしい話を避けて、いろいろ工夫をしても、そこは文法の話である。世に文法嫌いは多い。ひょっとしたら数学嫌いや多い。そこで、いじわるな伊地先生が五人の学生とやりとりしながら、授業を進めるという形にしてなじみやすくしてみた。熱烈な巨人ファンで菓子パンが大好物の伊地先生が、学生たちからかわれながら、「田舎の味」と「田舎な味」、「彼女は旅立った」と「彼女が旅立った」の意味の違いなどを説明していく。勉強だと思わず、ちよつとした発見があると思つて、「どぞぞ」一読あれ。

(加藤重広)

「少年犯罪抑止の試み」改正少年法の誕生

今年の四月一日から改正された少年法が施行されています。せつかく生まれても世間的には何の話題にもならず終わる法律が多い中で、改正された少年法は、有名芸能人に子供が生まれたのと同じくらいには話題になった、比較的珍しい法律です。今回は、この改正少年法を手懸かりにして、少年犯罪について少し考えてみることにしましょう。

「注目改正ベスト2」

まず、今回の改正で少年法の何が変わったのでしょうか。これをいちいちあげると両手の指を総動員しても足りないのですが、世間の注目を集めた改正点を二つあげれば、「刑事処分年齢の引き下げ」と、「原則逆送制度の導入」ということになるでしょう。

花子と太郎のけんか

例えば、幼稚園児の花子ちゃんが隣組の太郎君とけんかをして、彼を投げ飛ばして骨折させても、傷害容疑で警察に逮捕されることもなければ、起訴されて裁判で有罪とされることもありません。

これは、読者のみなさんも常識としてご存じのことと思いますが、法律的に言えば、刑法四一条が「一四歳に満たない者の行為は、罰しない。」としているからです。

では、一〇年後、立派に成長して一五歳になった花子が太郎君と同じことを

したらどうでしょうか。実は、今回の少年法の改正以前は、花子が逮捕・起訴され有罪とされることは、やはり、法律上あり得なかったのです。

一五歳といえは刑法上は処罰可能な年齢なのになぜ？と疑問に思われた方も多いと思いますが、これは、改正前の少年法二〇条が、家庭裁判所が一六歳未満の少年を検察官に送る（正確には、送り返す）ことを許していませんからです。

少年の事件（いまは刑事事件の話ですが、刑事以外の事件でも同じです）は、図1にあるように、警察・検察を経由して、いったんすべて家庭裁判所に集められます。ですから、家庭裁判所が少年を検察官に送ることが許されていない以上、検察官はその少年を起訴しようがありません。起訴できなければ、刑事裁判も始まりません。それ、結局のところ、刑事処罰が不可能だったのです。

これは、その少年が起こした事件が

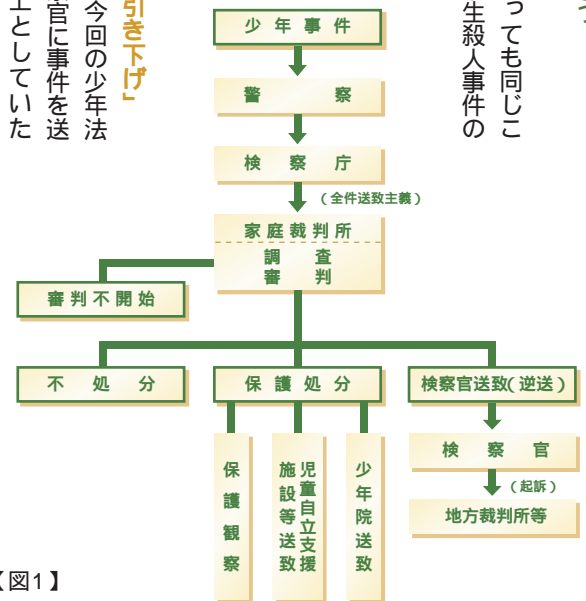
どんなに凶悪・重大であっても同じこと。例えば、神戸の小学生殺人事件の犯人であった「酒鬼薔薇」少年は処分当時一五歳でしたが、彼を殺人犯人として処罰することも、少年法が定める手続上、不可能だったのです。

改正 「刑事処分年齢の引き下げ」

そこで、この話ですが、今回の少年法改正で、家庭裁判所が検察官に事件を送り返せる年齢を一六歳以上としていた旧二〇条の制限が廃止されました。この結果、家庭裁判所としては、犯行時に一四歳以上だった少年については、刑事処分が適当と考えるならば、検察官に逆送できることになりました（新二〇条一項）。但し、軽い犯罪については例外がありません。

改正 「原則逆送制度の導入」

とはいっても、家庭裁判所が少年を



【図1】

検察官に「逆送できる」ということと、実際に「逆送する」ということは同じではありません。実際、表2にあるように、検察官が「刑事処分相当」という意見を付けて家庭裁判所に送った少年の相当数は、検察官の意に反して家庭裁判所に行ったきりとなり、刑事処分を受けることはなかったのです。

このように、家庭裁判所には、重大な事件を犯した少年であっても刑事処分の対象とすることは慎重な傾向があったのですが（家庭裁判所からすれば、検察官の処罰指向が強すぎるだけだ、となるのでしょうか）、今回の改正少年法は、これにも一定の制限を加えました。これが、「原則逆送制度の導入」です。この改正により、家庭裁判所は、一六歳（一四歳）でないことにご注意！）以上の少年が故意の犯罪行為（殺人以外に、強盗、傷害等も含まれます）によって被害者を死亡させたという場合には、原則として検察官に逆送しなければならないこととなり（新二〇条二項、逆送後は起訴が予定されています「四五条五号」）、少年が刑事処分を受ける可能性がかなり広がったのです。

「厳罰化としての少年法改正の意味」

今回の少年法改正には、以上のほかにさまざまな内容がありますが、そ

【表2】 検察官の処遇意見と家庭裁判所との決定の合致率 [罪名別(平成7年~平成11年)]

	家庭裁判所 処分総数 (A)	Aのうち刑事 処分相当意見 を付して送致 した件数(B)	刑事処分相 当意見の割 合(B/A)	Bのうち 検察官送致 決定件数 (C)	処遇意見と 決定との合 致率(C/B)
殺人	210	93	44.29%	52	55.9%
強盗	5,110	511	10.00%	154	30.1%
傷害	40,209	786	1.95%	201	25.6%
窃盗	337,830	986	0.29%	216	21.9%

れでも、上記の「代表される」少年事件の「厳罰化」、これによる少年犯罪の抑止が、改正の大きな目玉であったことは確かです。これには一定の正当性が認められると思いますが、とはいえ、少年は、ある日突然ソニーに噛まれたように犯罪者に変身するわけではありません。犯罪行為を行った少年の中では、そこへ至るプロセスが、

顕在的に、あるいは潜在的に、ひとつの流れのように進行していたと見るべきでしょう。

厳罰化は、いわば犯罪行為の出口の部分に強力な「蓋」をかぶせることで、これだけで犯罪行為が完全に抑えられるわけでも、犯罪行為以前の問題が解消されるわけでもありません。少年犯罪の抑止には（大人の場合も同じなのですが）、「蓋」の強化以外にも、**少年を犯罪行為へと向かわせるプロセスの流れを止める**、あるいは、少年がその圧力に屈しないように、「外壁」を強化する等の措置を講じることも必要です。

そして、これらは、厳罰化のみによっても実現できることではないのです。少年犯罪を防止するためのシステム全体の改良、そして少年法を含めた「構成部品」の点検は、今後も引き続き取り組まなければならない課題だということをお話して、この稿を閉じることとしましょう。

（文献のご紹介：改正の全貌を正確に理解できるものとして、『甲斐行夫、O&A改正少年法』有斐閣二〇〇一年、一三〇〇円）と安いのは美点ですが、正確すぎて少々難しく感じられるかも知れません。なお、本稿の二つの図表は、同書四頁、三三頁から引用しました。もう少しコンパクトな文献としては、『法律のひろば』五四巻四頁（きょうせい）二〇〇一年、雑誌のバックナンバーです。図書館なら調べられます。）



近藤 和哉

Kondou Kazuya (こんどう かずや)

1964年11月生まれ
1994年 上智大学大学院 法学研究科 博士後期課程修了
1997年 富山大学経済学部講師
1999年 富山大学経済学部助教授
専門分野：刑事法

TOM'S Essay

コーネル大学を訪ねて

高井 正三 (たかいしょうそう)

1950年11月生まれ
1973年 富山大学文学部理学科物理学専攻卒業
1996年 富山大学総合情報処理センター助教
専門分野: ソフトウェア工学

ニューヨーク州イサカ空港から車で一〇分位走ったところにコーネル大学があった。
大学内にあるスタッター・ホテルのカウンターでチェックインの手続きをしてくれたのは学生アルバイトのようだった。
コーネル大学にはSchool of Hotel Administrationがあり、世界各国からホテル運営学を学ぶ学生がきていて、このホテルで実習を兼ねて働いているようだった。



Cornell Theory Center



左からワロナー博士、筆者、フレア副所長、ドワイヤー博士 (Stakehouse前にて)

このようにして洗濯を減らし、省エネルギーと環境保護に貢献しようとしている。私たち日本人も、「旅の恥は掻き捨て」という悪い習慣を見直し、これからは「もったいない」というかつての良い習慣を実践したいものである。

普段着に着替えて、構内を散歩に出かけた。広い広いキャンパスである。構内にはボリス・ビルがあつて、警官が勤務していた。日本の大学では考えられないことだ。
大学院生というオンライン図書館を通つたが、日曜日の夕方というのに明かりが煌々と点いていた。次の月曜日、ケネディ・ホールという建物に入ったが、ここでも学生は休み時間というのに、廊下に座つて皆んなよく勉強をしていた。日本の学生も、このように学びたいものである。

学長就任のご挨拶



富山大学長 龍澤 弘 (たきざわひろし)

はじめに、新学長として、平成九年度、一〇年度における人文学部入試合否判定の誤りと、この事実が判明してから本年六月まで、本来合格していた十六名の受験生を不合格のまま放置したことについて、十六名並びにその関係者の方々の心情は察するにあまりあるものがあり、心からお詫び申し上げます。

また、これによって富山大学が社会的な信頼を失墜したこと、富山大学の卒業生をはじめ多くの学生諸君の心にも深い傷を与えたことは痛恨の極みであります。
この重い十字架を背負つて、今富山大学では、教職員が一丸となつて信頼の回復に、また卒業生や在学生の諸君が胸をはつて富山大学を誇りに思うことができるよう

努力を重ねております。さて、国立大学は地域社会に貢献しているのか、というご意見があります。富山大学はすでに「地域共同研究センター」や「生涯学習教育研究センター」等の早期の設置、全国に先駆けた附属図書館における一般市民への利用証の発行など、地域に開かれた大学を実現してきました。

研究と教育は大学の最大の使命ですが、このためには常に大胆な自己変革の意欲が必要です。この意欲を土台に、県内三国立大学の再編・統合問題の検討を契機として、さらなる知の創造と地域への貢献を進めたいと思つております。皆様方のご支援をお願い申し上げます。

学内探訪

南日恒太郎像

旧制富山高等学校初代校長



大学正門から、ユリノキ並木をまっすぐ歩くと附属図書館に突き当たります。図書館のすぐ左に人文学部をみつめる南日恒太郎先生の胸像があるのはご存じでしょうか。

話はさかのぼって、昭和二十四(一九四九)年五月本学が新制大学として発足した時は、文学部、教育学部、薬学部及び工学部の四学部体制でした。そのうち文学部は、現在の人文、経済、理の三学部の母体となつた学部で、その前身は、大正十三(一九二四)年に開校された旧制富山高等学校でした。

旧制富山高等学校は、一人の女性篤志家と一人の情熱あふれる教育者によつてその礎を築いたといわれています。女性篤志家は、東岩瀬町で北前船の回船問屋を営む馬場家の馬場はる子女史であり、大正十二(一九一三)年、当時の県の年間教育予算約一六〇万円に匹敵する一三四万円を寄付されるなど、学校創設に大きく貢献されました。
一方、教育者は、高等文官試験合格後、

三高(現在の京都大学)講師、学習院教授を歴任した富山の山室出身の英文学者、南日恒太郎先生で、初代校長に就任

後、全国から優秀な講師陣を集めることも、当時僻地といわれた富山を「文化の中心にしたい」として、ヘルン文庫の入手に尽力されました。その文庫目録の序文には「May it serve as Plerian Spring」願わくばこの文庫が「エリアの泉とならむことを」とあり、文庫に寄せた南日先生の熱い思いが伝わります。そして、胸像の前に立つと、このような大先輩や篤志家の尽力によつて本学が支えられているのだなあとという感謝の気持ちが湧いてきます。



南日恒太郎先生の像



旧制富山高等学校 校章

編集後記

ユリノキの下を歩いて登校した。春には緑に茂り創刊号の表紙を飾つたが今は黄葉を始めている。落ち葉を踏み分けての登校であったが、雨風のいたずらか黄葉を待たずに散つた葉も少なからず見られた。

今号の学内探訪は図書館横から人文学部をみつめる南日恒太郎先生の胸像となり、表紙にも後ろ姿で登場していただいた。

南日先生の胸像は平成十年、現人文学部校舎が竣工した際、以前の人文学部の場所から移転された。雪に埋もれ、日に照らされ、幾星霜を経て旧制富山高校、富山大学をみつめてきた。

創刊号の学内探訪がヘルン文庫であり、県立旧制富山高校を官立以上の学校にしようと、ヘルン文庫の創設に尽力されたのが初代校長の南日恒太郎先生であった。

南日先生の教育理念は「進取、反省、協調」であったと聞く。大学の新生・再編・統合の中にあつて、当時の建学の精神を省みることにも必要ではないだろうか。(K・K)

Reader's Voice

読者からの声

私立大学に負けない広報誌、さすが総合大学と再認識した。広く学外に配付してPRを。(S・M) 意外に良くできており、編集担当者の苦労がみえるようだ。次号では写真ももっと丁寧な扱って欲しい。(F・M) 入学式で拝見。次号以降も是非とも読ませて欲しい。(H・S) 国立大学らしくらぬ広報誌と聞いたが、確かにそう。受験情報誌で紹介してみたい。次号以降も期待する。(K・O) 字が細かいところがあるが、全体としてはよくできている。次号でもいろいろ工夫を。(A・M) 内容がしっかりして読めるものになっている。次号も期待しています。(T・K) 入試合否判定過誤の隠蔽は本当に残念。教育者としてあるまじき行為。知性を導く大学には、良心と真の後悔が存在して欲しい。(匿名)

創刊号及び第2号に寄せられた読者の声を掲載させていただきました。委員会で、第3号の編集にあたり、これらの貴重な声を反映させるべく努力いたしました。皆様のご意見・ご要望をお待ちしています。(編集委員会)



TOM'S Magazine

富山大学広報誌 TOM'S トムズマガジン 第3号

発行日 平成13年11月22日 発行 富山大学広報委員会 問合せ先：富山大学総務部企画室 〒930-8555 富山県五箇3190 TEL 076-445-6029 FAX 076-445-6033 E-mail: kouhou@adm.toyama-u.ac.jp トムズマガジンはインターネットでもご覧いただけます。http://www.toyama-u.ac.jp/TOMS/ 印刷製本株式会社ニッポ

平成13年度公開講座

「教養講座」
シニアから始めるインターネット講座(2回目)
11月26日・11月30日 5回
15時間 定員：30人

「健康・スポーツ講座」

親子スキー教室
1月26日・1月27日 2日間
15時間 定員：親子20組

公開講座の申込み・問合せ先
生涯学習教育研究センター
電話 076 445 6056
ファクス 076 445 6060
E-mail: lifelong@life.toyama-u.ac.jp

行事

「教育課程フォーラム」

富大附属小学校の新教育課程(平成14年度版)を示したファイル(通称「めざせ授業の鉄人」)が完成しました。今回のフォーラムでは、新しい教育課程を運用していくときに大切にしなければいけないこと、これからの学校運営の在り方等、将来を見据えた話し合いができればと思います。ご参加をお待ちしております。

日時 11月28日(水) 13時30分～16時30分
場所 教育学部附属小学校
問合せ先：教育学部附属小学校
電話 076 445 2803

「日本物理学会北陸支部学術講演会」

富山、石川、福井3県の日本物理学会会員、自然科学系専攻の大学院生及び学部学生が集まり、特別講演、研究成果の発表、討論を行います。

特別講演「加賀藩時代の天文学」
講師 渡辺 誠
(富山市科学文化センター専門学委員)

日時 12月1日(土) 13時30分～16時30分
場所 理学部
問合せ先：物理学科 櫻井醇児
電話 076 445 6581

表彰

山西潤一教授が「北陸テレコム懇談会会長表彰」を受賞



7月24日 山西潤一教育学部教授が、北陸における次世代情報ネットワーク並びに次世代情報教育のあり方など地域の情報通信の普及・発展に多大な貢献をしたとして北陸テレコム懇談会会長表彰を受賞しました。

山西潤一教授は教育情報システム所属で、専門は教育工学。

科目等履修生・聴講生制度についてのお知らせ

生涯学習社会といわれる現代においては、退職し再び大学に入学してフルタイムの学生生活を送る方や、自分自身の教養・能力を高めるため大学において特定の授業を学習する方が増えています。後者の学習制度は、科目等履修生・聴講生制度といえます。本学で開講されている数々の授業(教養教育及び専門教育も、同制度により、本学学生でなくとも履修・聴講することが出来ます。ただし、授業実施上支障が生ずる科目は除きます。)関心のある方は左記までお問合せください。

学生部学生課教務係
電話 076 445 6097

富山大学施設利用のお知らせ

富山大学の施設は、富山大学の行事、授業及び課外活動に支障がない限り、公共的な行事及び企業や一般市民の方の営利を目的としない行事に使用することができます。
ご希望の方は左記までお気軽にお問合せ下さい。

経理部主計課管財係
電話 076 445 6042
ファクス 076 445 6044
http://www.toyama-u.ac.jp/

全国大会

全国国立大学生涯学習系センター 研究協議会を開催

10月25日、26日の両日にわたり、第23回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が、本学当番により富山国際会議場において開催された。全国26の大学・短期大学の生涯学習系センターから74人の教員・事務担当者が参加した。

初日は、小澤浩学長及び文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課の金口恭久課長の挨拶に続いて、公開講座等事業に関する広報活動の取り組みについて、高等教育機関によるリカレント教育、その調査研究と実践例、公開講座の独立採算開講について、今後の協議会の開催方法について、SCS利用による開催、または地域別分科会方式についての検討 が協議された。

第2日目は、「インターネットによる大学開放の可能性」についてのパネルディスカッションが行われ、米田政明 本学工学部教授の基調講演に続いて、「インターネットを活用した県教育委員会の施策」(久津武司 富山県教育委員会生涯学習室長)、「インターネット市民塾を実施して」(長谷川総一郎 本学教育学部教授)、「企業人の学習の変化」(柘 富雄 ㈱インテック行政システム事業本部参事)などの報告があり、活発な質疑討論が行われた。



情報教育シンポジウム



特別講演での中尾インテック社長

また、㈱インテック代表取締役、中尾哲雄社長による「情報教育への期待」と題する特別講演も行われ、急速に進展する情報化の中で、何をなすべきか困惑している多くの教師に対して、「ヘーゲルの言葉「迫り来る夕闇の中にミネルバの鳥は飛び立つ」を引用され、今こそ教師が頑張る時代だとの言葉に多くの教師が感銘を受けた。本学会場では約120件の研究発表が行われ、終日白熱した議論が展開された。延べ2000人の教師や研究者等、教育関係者が集まり富山から秋晴れの中、さわやかな情報教育の風が全国に発信された。

21世紀の情報教育の在り方を探る

本学と県内13の学校が連携

10月26日、27日の両日にわたって、日本教育工学協会主催のコンピュータ教育や情報教育に関する研究全国大会が、本学教育学部の山西潤一教授を実行委員長に、本学、富山県教育委員会等の共催、文部科学省他の後援を得て開催された。

地方教育学部の在り方が問われている中、「あいの風にのせて、21世紀に広げるネットワーク」のスローガンのもと、本学が県内13の小中学校、中学校、高等学校、養護学校との連携をはかり、富山から全国へ、情報教育のあるべき姿を発信した。

全国各地から多数の教師が公開授業の参観に訪れ、全体会では、「21世紀の情報教育の展開」を巡って、文部科学省生涯学習政策局学習情報政策課、尾崎春樹課長の話を皮切りに山西潤一教授のコーディネートで、これからの情報教育の進め方や教師の意識改革についての熱いパネルディスカッションが繰り広げられた。

TOM'S Magazine 編集委員会 塩澤 和章 副学長(委員長) 向後 千春 教育学部助教授 高井 正三 総合情報処理センター助教授
加藤 重広 人文学部助教授 伊藤 研策 工学部助教授 志津田 一彦 経済学部教授
小林久寿雄 理学部教授 前田 邦樹 総務部企画室長

本誌は、富大構内などで無料配布しています。郵送のご希望もお受けいたします。本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。無断転載はご遠慮下さい。

特集・対談

越中方言の謎を語る

中井精一 富山大学助教授
相本芳彦 KNBAアナウンサー

研究 漫(こて)絵とは?
紹介 大学人物ファイルNo.3 末岡宗広氏
施設紹介 生涯学習教育研究センター
研究室への招待
BOOK REVIEW「おじいさんは山へ金儲けに」みんなの日本語教室」
カイセツの鉄人
少年犯罪抑止の試み〜改正少年法の誕生〜
TOM'S Essay 学内探訪 南日恒太郎像
学長就任の「挨拶

No.3 Autumn 2001